



所在地 伊勢原市西富岡地先

調査期間 令和 2(2020)年 4月 1日～

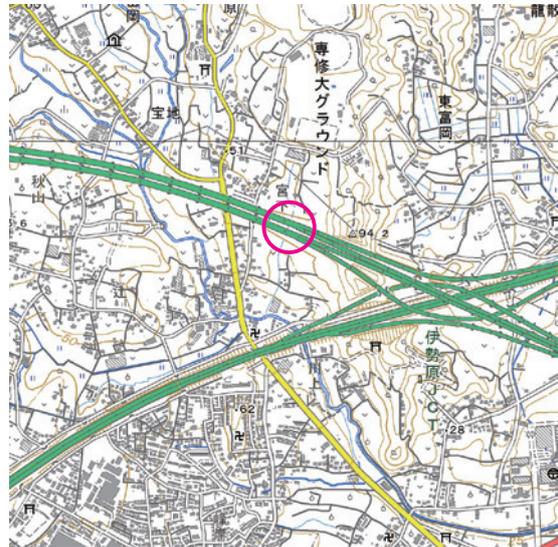
令和 3(2021)年 3月 31日

調査面積 3803m<sup>2</sup>

担当者 新開基史、新山保和

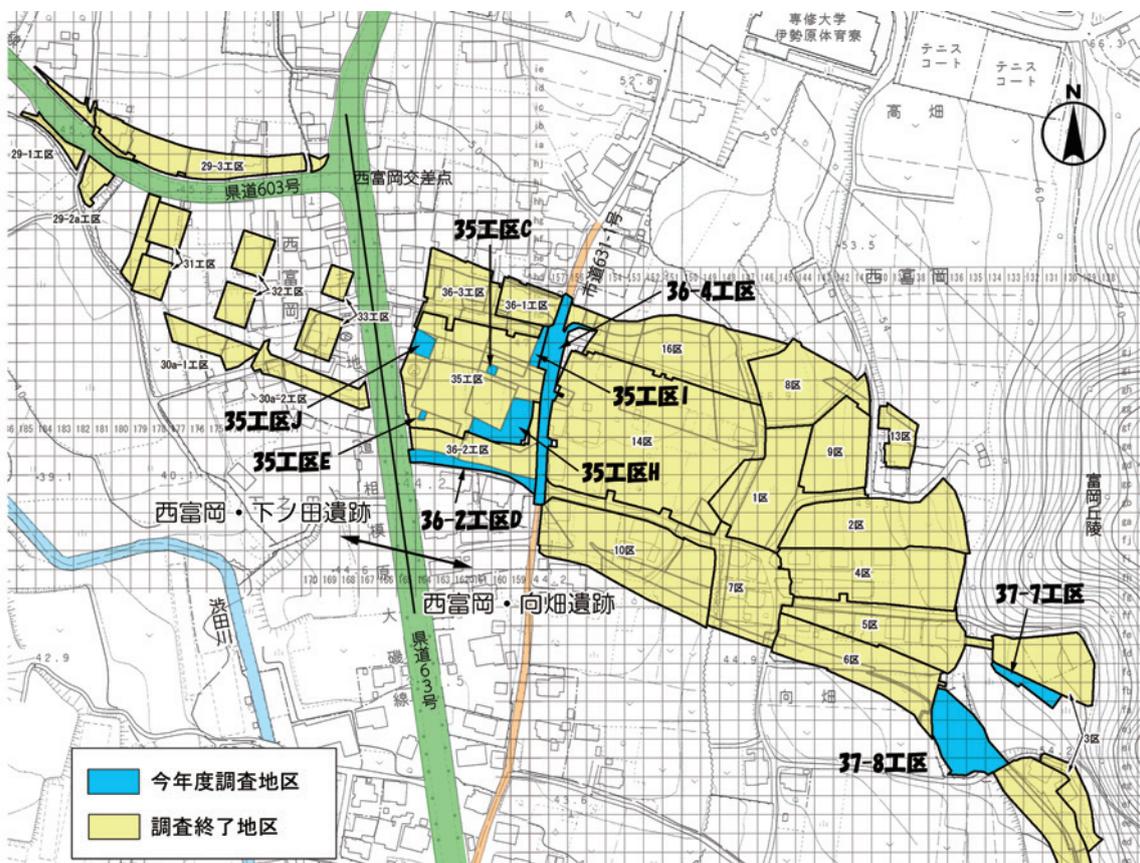
### 調査概要

西富岡・向畑遺跡は伊勢原市北部の丘陵地帯にあり、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所による新東名高速道路建設事業に伴う事前調査として実施しました。遺跡は、渋田川左岸の台地上にあり、西を渋田川、東を富岡丘陵に画された南西向きの日当たりの良い緩斜面に位置しています。今年度の調査区は、県



第1図 調査位置図 (1/25000)

道 63号・市道 631-1号周辺と富岡丘陵の裾部にあたり、標高は 35工区付近で 47 m、37-7



第2図 調査区配置図 (1/4000)

工区付近で55mを測ります。今年度は、小規模な調査区を含め9箇所の調査を実施しました。このうち中・近世の道路遺構が確認された36-4工区と縄文時代後期末頃の埋没林が発見された37-8工区の成果について紹介します。

### 36-4工区の調査

高速道路高架下を南北に横断する市道631-1号部分の調査です。現代の舗装を撤去すると直下に昭和40年代頃の砂利道があり、その下から中・近世の道（C7号道）が確認されました。近世の道は、深い部分では周囲の地盤から1.7mほどの深さで堀状に凹めた掘り方の中に造られており、掘り方の最大幅はおよそ6mもあります。宝永4（1707）年の富士宝永火山灰の直上と直下、そして最下部の掘り方直上と大きく3面の道路硬化面が確認できました。場所によ



写真1 36-4工区 C7号道全景（北から）



写真2 36-4工区 C7号道掘り方 波板状凹凸面

りさらに複数の硬化面があり、流れ込んだ土を踏み固めたり、修繕を繰り返しながら使われたようです。掘り方（路床）には波板状凹凸面と呼ばれる道の方向と直交する溝状またはピット状の凹みがあり、これらの凹みを中心にこぶし大以下の礫が多く見つっています。硬化面の土は、水が浸透しやすいように粒径の大きい火山性噴出物を多く含む黒色土（古墳時代から平安時代頃の堆積土）を好んで使用していました。また、硬化面は西側に傾斜させて雨水を側溝状の溝に流す構造になっていて、降雨時に路面が泥濘にならないように工夫された様子がわかりました。この近世の道の西側には、さらに古い段階の道の掘り方（波板状凹凸面）が2～3段切り合っていることが確認され、これ



写真3 36-4工区 西側に傾斜した硬化面（北から）

らは中世に遡る道と考えられます。

今回調査した道は「相州大住郡西富岡村絵図」(堀江文書)という江戸時代の絵図にも載っています。調査範囲の北端部は北と西へ分岐しており、北は現在の伊勢原市運動公園付近で富岡丘陵を越え、岡津古久を抜けて厚木方面へ、西は日向方面へとつながることがわかりました。南端部でも南と東へ分岐しており、絵図には途中までしか描かれていませんが、東は数回クラックしながら現在の東名高速道路付近で東富岡へ抜けるルート、南はおそらく現在の国道246号にあたる矢倉沢往還へとつながっているとみられます。道の規模や造りから、隣接地域間をつなぐ重要な道であったと考えられます。

### 37-8 工区の調査

丘陵裾の小規模な台地状地形の先端に位置する調査区です。この地形は、斜面崩壊(地すべり)で南西方向に流れ出した土砂が形成した押し出し地形と呼ばれる地形で、隣接地の調査結果から、地すべり層の上部に古墳時代後期以降の集落跡、下部に縄文時代後期以前の集落跡が確認されることがわかっていました。

調査開始前は宅地であったため、構造物による破壊が及んでいましたが、今回の調査でも、地すべり層の上部から古墳時代後期以降の竪穴住居跡3軒が確認されました。この古墳時代面の下は、縄文時代中期以前の包含層と関東ローム層が厚い部分で5mほど堆積していましたが、これらは地すべりにより斜面上部からすべり落ちてきた再堆積土で、これらの層の下から地すべりでなぎ倒された樹木がみつかりまし

た。細いものを含め数百本のなぎ倒された樹木は大部分が斜面の下方に梢を向けて倒れており、樹木の出土状況と堆積の様相から、地すべりの発生から埋没に至ったイベントの過程について現在検討を進めています。また、この土砂災害の発生した年代を調べるため、複数の樹木の酸素同位体比年輪年代法による年代測定を実施中で、このうちの1本について測定結果が出ています。残念ながらこの木は表面が炭化していたため最後まで年輪が残っていませんでしたが、3243年前まで生きていた木だとわかりました。

樹木を含む層は水分の多い黒色土で、縄文時代後期・中期の土器や石器などの遺物も多く含んでいます。この層の中からは、樹木のほか、まだ緑色が残る葉、下生えのササ類、昆虫遺体、鳥の羽、獣骨など様々な動植物遺体が見つっています。樹木は幹が綺麗に残っていて、樹皮やへばりついたコケ類まで残っていました。また、約3200年前の縄文時代の鳥の羽の発見は全国初で、まだ信じられないほどしなやかさが残っており、細部まで観察することができます。

今回の埋没林の発見は、通常は有機質遺物が残る環境にない台地上での発見であること、そして縄文時代集落のすぐ横にある森の動植物が生のまま残っていて観察できるという点で大変貴重な発見です。発掘は令和3年度に継続中で、様々な自然科学分野の研究者とともに縄文の森にどんな動植物が生息していたのか、どのようにして現在まで残ることになったのかなど、解明に向けて調査を進めています。(新開)



写真4 37-8 工区 縄文時代埋没林検出状況全景（北西から）



写真5 37-8 工区出土緑色の残るササ類



写真7 37-8 工区出土セミ幼虫頭部（南から）



写真6 37-8 工区出土フクロウの羽（上は出土状況）



写真8 37-8 工区出土アオオサムシ